

横浜美術館フレコズの流れ

お気に入りの絵を選ぶ

10点のなかからお気に入りの作品をお選び下さい。

申し込む

裏面の「お申込み方法」をご参照ください。

参加費の使いみちは？

みなさまからの参加費は支援金と位置づけ、2010年4月1日から2011年3月31日までの1年間に、以下の活動に活かします。



KEEP

選んでいただいた
作品の保存



EXHIBIT

選んでいただいた
作品の展示



GUIDE

コレクション展の
ガイドツール制作

うれしい特典がついてくる！

2010年4月から2011年3月までの1年間で、下記のような特典をご提供します。

- 1 支援して下さる作品の展示期間中、お名前を展示室の入口に掲出して謝意を表します。
- 2 コレクション展(年3期)ごとに、学芸員によるトークにご招待いたします。
- 3 横浜美術館の企画展オープニングにご招待いたします。
- 4 横浜美術館の企画展とコレクション展には、何度でもご入場いただけます。
※1作品ごとに支援作品の図版入りのフレンズ証を発行いたします。
- 5 年3期のコレクション展ごとに、café小倉山でソフトドリンクをサービスいたします。(1期につき1回、会員様お一人のみ)

07

今村紫紅《伊達政宗》

1910(明治43)年 絹本着色、軸
120.5×71.0cm

今村紫紅は横浜生まれで日本美術院の画家。独眼竜と呼ばれた名将・伊達政宗の姿を堂々と描いています。右奥の十字架は、死装束に黄金の磔柱を押し立てて豊臣秀吉のもとに参じ、一揆煽動のかどに対する身の潔白を証したという逸話にちなんでいます。



08

コンスタンティン・ブランクーシ《空間の鳥》

1926年 ブロンズ、石(台座)
134.2×35.5×35.5cm

ブランクーシはルーマニアに生まれ、パリで活躍した彫刻家。《空間の鳥》は故郷の伝説の鳥マイアストラを表現したもの。大理石やブロンズで繰り返し制作され、抽象化・流線型化が進みました。台座も彫刻家のデザインです。



09

アンリ・カルティエ＝ブレッソン《サン＝ラザール駅裏、パリ》

1932年 ゼラチン・シルバー・プリント
35.3×24.3cm

世界的に有名なフランスの写真家カルティエ＝ブレッソン。彼の写真の代名詞である「決定的瞬間」を代表するのがこの作品。日常的光景から切り取られた絶対的な調和の瞬間が、観るものの記憶に深く刻まれる写真です。

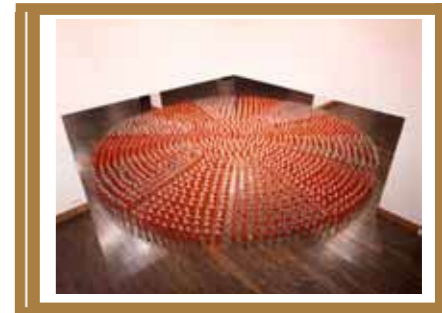


10

柳幸典《バンザイ・コーナー》

1991(平成3)年 プラスティック人形、鏡 90.0×183.0×183.0cm

柳幸典は、日本の歴史や制度、社会問題などをテーマに制作する現代美術家。90度の角度で立つ2枚の鏡の前に赤い粒が並びます。連なる粒の正体は、バンザイの姿勢で整列するウルトラマンとウルトラセブンのビニール人形。鏡に浮かび上がる旭日旗のイメージには、現代日本への辛辣な皮肉が表れています。



2010年度の横浜美術館フレコズ 支援作品

01

ルネ・マグリット《王様の美術館》

1966年 油彩、カンヴァス
130.0×89.0cm

シュルレアリスムの作家マグリットは、言葉とイメージの意外な組み合わせによる詩的な表現を目指しました。この作品は、山高帽の男のシルエットに風景が広がる不可思議な空間と謎めいたタイトルが観るものを惹きつけます。



02

ギュスターヴ・モロー《岩上の女神》

1890年頃 グアッシュ、紙
30.2×19.7cm

ギュスターヴ・モローは、神話や宗教的テーマに託して内面的世界を描いたフランスの画家。男性を魅惑しつつ破滅に導く「運命の女」を好んで描きました。美しい女神を描いたこの作品は、繊細な筆致と巧みな色使いで、怪しい輝きを放っています。



03

下村観山《小倉山》

1909(明治42)年 絹本着色、六曲一双 各157.0×333.5cm

下村観山は日本美術院の創立に参画した画家。平安時代の公卿藤原忠平(貞信公)の和歌「小倉山みねのみみぢ葉心あらば今ひとたびのみゆきまたなん」を絵画化した作品。木立の中に坐し遠くを眺める人物が貞信公でしょう。百人一首を撰する藤原定家とする説もあります。



04



片岡球子《面構 浮世絵師鈴木春信と博物学者平賀源内》

1985(昭和60)年 紙本着色、二曲一双 各130.3×193.9cm

片岡球子は横浜市南区の大岡小学校でも教鞭をとった日本美術院の画家。「面構(つらがまえ)」は、球子が61歳から約40年間院展に発表し続けた画業の中心をなす連作です。この作品では、歴史上の人物を、歴史上の画家の想像力を駆使して描くことで独自のリアリズムを築いています。

05

高橋由一《愛宕山より品川沖を望む》

1877(明治10)年 油彩、カンヴァス 67.0×97.2cm

高橋由一は、日本洋画の先駆的な画家。明治9年に創設された工部美術学校のイタリア人教師フォンタネージの指導を得る機会を得た後、この作品を制作しました。薄く溶いた絵の具を塗り重ねる技法で、澄明な空気感を巧みに表現しています。

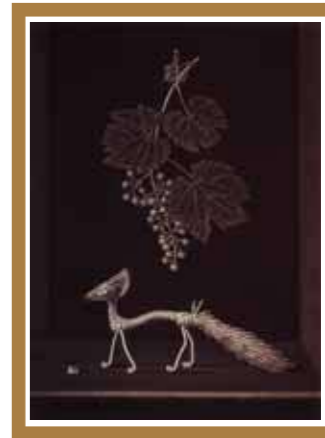


06

長谷川潔《狐と葡萄 (ラ・フォンテーヌ寓話)》

1963(昭和38)年 メゾチント、紙
35.5×26.5cm

横浜に生まれ、後にフランスに渡った長谷川潔はメゾチントの技法を独自に復元。晩年にふたたびこれに取組み、ピロードのような漆黒を誇る静物画を次々と生み出しました。狐の人形と一枝の葡萄とで、寓話のイメージをたくみに凝縮しています。



07

今村紫紅《伊達政宗》

1910(明治43)年 絹本着色、軸
120.5×71.0cm

今村紫紅は横浜生まれで日本美術院の画家。独眼竜と呼ばれた名将・伊達政宗の姿を堂々と描いています。右奥の十字架は、死装束に黄金の磔柱を押し立てて豊臣秀吉のもとに参じ、一揆煽動のかどに対する身の潔白を証したという逸話にちなんでいます。



08

コンスタンティン・ブランクーシ《空間の鳥》

1926年 ブロンズ、石(台座)
134.2×35.5×35.5cm

ブランクーシはルーマニアに生まれ、パリで活躍した彫刻家。《空間の鳥》は故郷の伝説の鳥マイアストラを表現したもの。大理石やブロンズで繰り返し制作され、抽象化・流線型化が進みました。台座も彫刻家のデザインです。



09

アンリ・カルティエ＝ブレッソン《サン＝ラザール駅裏、パリ》

1932年 ゼラチン・シルバー・プリント
35.3×24.3cm

世界的に有名なフランスの写真家カルティエ＝ブレッソン。彼の写真の代名詞である「決定的瞬間」を代表するのがこの作品。日常的光景から切り取られた絶対的な調和の瞬間が、観るものの記憶に深く刻まれる写真です。



10

柳幸典《バンザイ・コーナー》

1991(平成3)年 プラスティック人形、鏡 90.0×183.0×183.0cm

柳幸典は、日本の歴史や制度、社会問題などをテーマに制作する現代美術家。90度の角度で立つ2枚の鏡の前に赤い粒が並びます。連なる粒の正体は、バンザイの姿勢で整列するウルトラマンとウルトラセブンのビニール人形。鏡に浮かび上がる旭日旗のイメージには、現代日本への辛辣な皮肉が表れています。

